

三角縁神獣鏡の新例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学考古学専攻講座創設二十五周年記念会 公開日: 2017-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 三郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18459

三角縁神獸鏡の新例

小林三郎

ここに紹介しようとする二面の三角縁神獸鏡は、いずれも銅鏡の研究およびわが古墳時代の文化を論ずる上に重要な意味を持ち、しかもそのいずれもが、最近再び検討の要を叫ばれている同范鏡についても充分に関連を有するものである。

その一は、明治大学考古学陳列館の最近の蒐集品であり、いま一つは昭和三十五年夏、明治大学考古学研究室が佐賀県多久市において遺跡を発掘調査中に、伊万里市史編纂委員から、伊万里市所在の一古墳からの出土品としてその鑑定を依頼されたものである。

このたび、この貴重な資料の紹介について便宜を与えられた伊万里市当局の御好意に対し、深謝の意を表する次第である。

(一)「天王日月」銘獸文帯三神三獸鏡(口絵1参照)

面径二二・四センチメートルを計り、鈕高一・八センチ

メートル、縁厚一センチメートル、平均〇・五センチメートルの反りを有する三角縁神獸鏡として通有な大きさである。内区は結節文座の鈕を中心に放射状に文様が肉刻されている。楕形文座乳六個をもつて内区主文様を六区に分ち、神像・獸形文を交互に配している神像はいずれも正面を向き円台座に座する姿勢をとる。獸形は面部のみ正面を向かせ肩部を側面から表現しているのは、三角縁神獸鏡の中でもある一部分の鏡群に見られる現象として注意を惹く。外区は外向鋸歯文帯にはさまれた「天王日月」銘を有する獸文帯から複線波文帯・外向鋸歯文帯の順に鑄出し、断面がほぼ正三角形を呈する典型的な三角縁をもつて終っている。獸文帯は四つの方形格と四つの小乳とによつて八区に等分され、飛禽・走獸文を交互に配置したものである。四つの方形格内には、いずれも「天王日月」銘を表現しており、各字画は省略されることもなく鑄出されている。鏡背、鏡面全体に緑銕

が覆つているが、鏡背文様が若干鮮明さを欠くのは、あながち緑銹のためのみとは断じ難いものがある。本鏡は、京都府物集女附近所在の古墳から出土したと伝えられており、滋賀県六地蔵蟹沢古墳、三重県筒野古墳、大分県赤塚古墳の各出土鏡と同范であることが認められているので、本鏡出土古墳およびその内容全体が明確に握めないのが甚だ惜しまれてならない。

(二) 三神三獣獸帶鏡(口絵2参照)

昭和二十七年、佐賀県伊万里市在住の中村善一氏が、瓦土採取中に本鏡一面と鉄剣片二口分を同一場所にて発見したといわれる。したがつて出土地は現在でも明確に知ることが出来る。すなわち、伊万里市の西を流れる有田川の河口近く川をはさんで東西には丘陵がなだらかに延び来つてゐる。本鏡出土地は、この有田川の東岸、伊万里市南川東の本路寺もくろじと俗に呼ばれている丘陵の最末端の水田地に接した場所である。本鏡出土の状態や地形を間接的にのみ知り得たわれわれは、いくつかの疑問を抱いて現地踏査を試みたが、その結果が意外に重大であつたのでこの遺跡に関する私見を含めた記述を若干する必要がある。

遺跡は、明らかに前方後円形を呈する古墳と認められ

る。古墳は不幸にして伊万里・有田間を結ぶ松浦線によつて中央のくびれ部が横に完く切断され、一見円墳の如き觀を呈している。現存する墳丘から觀察すると、全長一〇メートルに及ぶかとも思われる前方後円墳で、後円部径約六〇メートルもあろうか。墳丘の殆んどは地山を削つて整形したものの如く、明らかに盛土とおぼしきものは後円部墳頂に二メートル位の厚さにあるのみである。前方部を西に向けて水田に面し、それは後円部に比してかなりの比高を見せる前期形式の墳形を呈する。この前方部には、組合せ箱形石棺があつたというが現存せず、発見者の中村氏もすでに正確な記憶を持たない。鏡の出土地点は、古墳の後円部のほぼ中央、長軸に直交して長さ二メートル位、幅數十センチメートルの範圍に敷かれた礫床上に鏡背を上にして埋置してあり、それは墳頂下約一・五メートルの深さであつたという。更に鏡背には二口分の鉄剣片が銹着していたらしいが他の遺物は何等発見されなかつたらしい。したがつて、本古墳の内部主体構造が礫床を持つたものであることにはほぼ誤りがないと云えようし、すでに中村氏の発見以前にこの部分が大亂れを受けていたのかも知れない。

鏡は面径二二・三センチメートル、鈕高一・八センチメートル、縁厚一センチメートルを計る。鏡面・鏡背と

もに緑錆と鉄錆に覆われている。内区は結節文座鈕を中心にして、六個の円錐形乳によつてこれを六区に分ち、神像・獸形を交互に配している。神像は正面しているが獸面は曖昧で向きも一定しない。外区は獸帯ではじまり、櫛齒文帯・外向鋸齒文帯・複線波文帯を経て再び外向鋸齒文帯があつて、断面が正三角に近い三角縁をもつて終つている。獸帯には十個の小乳を配し、走獸文と二つの双魚文を鑄出している。走獸文はすべて同形を呈している。双魚文は鈕を中にして対称的に配置されている。この獸帯中に双魚文を配列する類例は各地にかなり尙見例を有するが、本鏡と酷似する例としては福岡県銚子塚古墳出土鏡、奈良県新山古墳出土鏡同宝塚古墳出土鏡、大阪府紫金山古墳出土鏡などが顕著である。いずれも文様表出の手法などから、これをわが国における倣製鏡として誤りがなく、奈良寺古墳出土の本鏡もその例にもれない。いまだ、本鏡と同范にかかる古墳出土鏡を明確に把握していないが、近い将来本鏡との同范鏡が明らかになれるであろう。いずれにしても、西暦五世紀代初頭に比定しうる奈良寺古墳およびその出土鏡は、これまで古式古墳の明らかになれていない、北九州西部における確実な尙見例として、将来の研究推進の端緒となるであろうという意味から貴重な資料と云えよう。